

書 名	おおかみこどもの雨と雪		
著 者	細田守	請求記号	913.6/H93 (メディアセンター所蔵)
著者 のプロフィール・紹介			
細田守（1967 年）は日本のアニメーション映画監督代表作の「時をかける少女」（2006 年）「サマーウォーズ」（2009 年）で国内外の注目を集め、2011 年に自身のアニメーション映画製作会社「スタジオ地図」を設立。その後、「未来のミライ」（2018 年）がアカデミー賞長編アニメーション映画賞にノミネートされるなど、日本を代表するアニメーション映画監督の一人。			
本の概要・要約			
細田監督による長編オリジナル作品が一冊にまとめられた本である。物語は主人公である 19 歳の女子大生と「おおかみおとこ」との出会いから、恋愛、結婚、出産、子育て、そして、二人の間に生まれたおおかみこどもの成長と自立までの 13 年間を描いた母と二人の子の深い絆を描いた内容である。細田はこの作品のテーマを「親子」とし、子育てをする母親の人生を主軸にした作品となっている。			
論評(この本を読んであなたが感じたこと、心に響いたこと、主張等)			
私はこの本から「子供」が成長する中で生まれる「決断」と「行動」を姉弟「雨と雪」の成長から感じる。それをあらわしているのが、「雨と雪」の立場の変化である。雪（姉）は活発で元気があり、おおかみに変身する能力を楽しんで、自然を満喫してさえた未就学児童時代があった。だが、小学校という「社会」になじみ、友達との学校生活を重視した彼女は、変身を悪いものだと判断し封印した。その結果、秘密を持つことへと発展し、結果的に爆発する。一方、雨（弟）は、最初は大自然に拒否反応があったが、「覚醒」以降は進んで行動を起こし、自然に奥深く入るようになる。そして、「檻にいたおおかみとの出会い」は雨の人生を変え、不登校を克服して、森に入るようになり野生の力を高めていった。そして「雨と雪」の二人は、互いの意見の食い違いで、喧嘩に発展し、今まで勝っていた雪が雨に敗北し、立場がいつの間にか逆転していた。子供だった姉弟はもう後戻りできないほど変化しており、どんどん大人に近づいている。その喧嘩の描写は、人として生きるか、おおかみとして生きるか大人になるための道を決断し行動する合図だったと感じる。人と獣、自身が選んだ道へ歩み始め、親から離れて自立する。この本は「決断と行動」が「心身の変化」とリンクすることで一つの人生を表していると私は読んだ。 最後に、私が心に響いた文として、花（母）は、「離れて暮らしていても、私はずっと、あなたたちのお母さんだから。」と。この 12 年間で振り返り「まるでおとぎ話のように一瞬だった。」と笑った。とても満足げに。と最後は締めくくられている。私は、寂しさ小さな幸せが合わさったような気持ちになり、たとえ遠くに離れても決して消えることのない、家族の絆を感じた。			
この本のおすすめポイント(どんな人にこの本を勧めたいか)			
母としてこれから子育てする人にこの本を勧める。この本は子育ての本質として、子供たちの命をつないでいくことが描かれている。「おおかみおとこ」の死で描かれたように、一瞬で終わってしまう程、はかないものが命である。それを花のように、いつか別れが来ると理解しても、めくるめく速度で成長し自立			

していく子供を導いていくことが重要である。それが、母親としての命の継承の表れだと思う。もし、子育てする際に、自身を見失いそうになる時、ぜひ、この本を手に取り読んで欲しい。